

# 琉球大学学術リポジトリ

## 集団討議の参加者の人数が集団決定および個人決定に及ぼす影響について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): the number of group discussion members, group decision, individual decision, group polarization 作成者: 高良, 美樹, Takara, Miki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/16907">http://hdl.handle.net/20.500.12000/16907</a>

# 集団討議の参加者の人数が集団決定および個人決定に及ぼす影響について

The effects of the number of group discussion members on group decision and individual decision

高 良 美 樹  
Miki TAKARA

本研究の第1の目的は、集団討議の参加者の人数の違いが集団決定および個人決定に及ぼす影響について検討することであった。実験の結果、集団サイズの違いは、集団分極の程度に違いをもたらさなかった。集団サイズの異なる各群に一貫して集団分極がみられたが、個人状況にもどるとその傾向は維持されずに、実験参加者は、集団討議を介して自らの意見に対する確信度を強めていた。第2の目的は、集団サイズの違いが集団討議過程に及ぼす影響について検討することであった。集団サイズの増加は、集団内に多様な意見をもたらし、他成員に対しての魅力の程度を高めたが、一方、小グループの出現や不参加者の増加をもたらすことが明らかになった。

Key words : the number of group discussion members, group decision, individual decision, group polarization

## 目 的

われわれは、日常生活の中で他者と協同し、様々なことがらに関して討議した上で決定を下し、それに基づいた活動をおこなっている。集団や組織の運営に成員の意見を反映させるためには、成員間で討議し、集団での意志決定に至るという手続きが不可欠であると思われる。また、このことは、集団での意志決定が個人の意見を正確に反映したものであることを前

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

提としていると言えよう。

ところが、集団成員個々人の意見は、より極端な形で集団決定に反映されるとする集団極化現象（group polarization phenomenon）が見出されている。集団極化現象とは、集団を形成する成員個々のもとの意見や判断の支配的傾向が、討論などの集団経験を経た後、さらに強められることをいう（Myers & Lamm, 1976）。

不確実な状況における意志決定において個人と集団の意志決定内容を比較すると、集団状況の方がよりリスクな意志決定をするを見いだしたリスク・シフトに関する諸研究（Wallach, Kogan, & Bem 1964など）と、逆に集団状況においてより安全な方向への意志決定を示すコウシャス・シフトの諸研究（McCauley, Stitt, Woods, & Lipton 1973など）といった研究間の対立が存在している。そこで、これらの現象を包括する概念として集団極化という考え方が提示されるようになった。

集団で討議し、決定を行うという手続きは、極めて民主的で合理的な方法であると考えられる。「三人寄れば文殊の知恵」ということわざは、集団での意志決定が豊富な知識や情報、多角的な視点という点において個人での意志決定よりも優れていることを示唆している。また、集団討議への参加は、決定に至る経過に関する成員の理解を促し、下された決定に関しても参加者自らの関与を高めると期待できることから、その決定の受容や実行についても可能性が高まると予測される（印南,1997）。実際、Lewin（1953）は、講義方式やマンツーマンの説得方式よりも、小集団による討議と個人的決意表明からなる集団決定方式の方が食習慣の変容に有効であることを示している。

一方、集団での決定が結論を誤ったものにするを示した「船頭多くして船山に登る」ということわざもある。Janis（1982）は、キューバ危機、ベトナム戦争でのケネディ大統領とその側近の政策決定過程を丹念に分析し、そこに集団での意志決定が陥りがちな特徴を見だし、この現象を集団的残慮（groupthink）と呼んだ。集団的残慮とは、極めて優秀な成員から構成された集団が、時間的制約の下で、個人では下しそうにない

誤った決定を全員一致でおこなうことをいう。

このような集団決定に関する功罪には、個人決定と集団決定のあいだに乖離が生ずるとする集団極化現象が深い関連をもっていると考えられる。集団極化現象の説明理論としては、責任の拡散説と社会的比較説が有力である。責任の拡散説 (Wallach, Kogan, & Bem 1964) にしたがえば、集団討議に加わった成員が選択の追求に失敗して感じる個人的責任は、単独でそれを決定したときに感じる個人的責任よりも少ない。よって、集団決定は個人決定よりもより極端なものとなりやすい。また、社会的比較説 (Sanders & Baron, 1977) は、個人が自己を望ましいものと知覚し、呈示しようとする社会的動機づけの作用を強調し、他者の意見や判断と接触し、他者との比較をおこなうことによって、より望ましい方向への意見や判断の変化が生じることを仮定する。その際、極端な意見ほどより目立つことから、その意見を中心に集団の意見が収斂していき集団極化が生じることになる。

責任の拡散説の考え方が妥当であるならば、集団討議の参加者の人数が多いほど、成員個々人が集団決定に対して感じる責任は軽くなる一方、討議への個々人の関与の程度は減じることが予想される。このことから討議の参加者の数が増加することによって集団極化が生じやすくなるが、集団決定が成員に個人的に受容される程度は低まることが予想される。

集団討議の参加者の人数が多いほど、集団内により多様で極端な意見が含まれる可能性が高まり、また、自らの意見をより多くの他者と比較することが可能になる。社会的比較説によれば、討議の参加者数の増加は、集団極化をもたらす一方で、成員が集団決定を受容し、自らの意見に対する自信の程度を深めることが予想される。

このようにふたつの説明理論は、集団討議の参加者の人数の違いが集団極化にもたらす影響については類似した予測をもたらすが、集団決定に対しての成員個々人の反応に関しては、異なった予測をもたらす。

さらに人数の増加は、集団全体の情報量を増加させるが、一人メンバーが増える度に増える情報量が減っていき、コミュニケーションの調整など

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

の限界コストの増加をもたらす（印南，1997）。このことから集団での意志決定の参加者の人数には、その課題に応じた適正な規模が存在すると考えられる。

これらの議論をふまえて本研究では、集団討議の参加者の人数が、集団決定および成員個々人の決定にどのような影響を及ぼすかについて検討することを第一の目的とする。

また、集団極化をテーマとした従来の研究は、集団討議の内容自体に関するの吟味が十分であるとはいえない。集団討議過程についての成員の認知の丹念な検討を通して、より詳細な現象の解明が可能になると考えられよう。そこで本研究では、集団討議に参加する人数の違いが討議過程にどのような影響を及ぼすかについて検討するために、意志決定課題に関連した判断以外に集団討議の内容についての成員の評価を測度に加え、検討を試みた。

## 方 法

### 【実験参加者】

地方国立大学で「人間関係論」「調査統計入門」を受講する大学生を、受講生名簿をもとに、男女比を考慮した以外はランダムに3人集団、5人集団、10人集団のいずれかに割り振り、授業時間を用いて一斉に集団で実験をおこなった。実験の実施は、各人数集団ごとにおこなった。欠席者の調整のため、5人集団は5～6人で構成され、10人集団は9～10人で構成された。3人集団は18グループ54名、5人集団は10グループ57名、10人集団は6グループ57名であった。最終的に男子86名、女子82名の計168名を分析の対象とした。ただし、欠損値があるため、個々の分析によってはデータの数が異なることがある。

### 【実験手続き】

実験参加者をグループに分けた後、成員間で簡単な自己紹介などを5分

問おこなわせた。

実験目的は、「思考と判断の関係を調べる」ものであると説明し、質問紙の冊子を実験者の指示に従ってめくっていく形式で実験を進行した。

実験課題は、「酒酔い運転で死亡事故を起こした加害者」に対しての責任を判断することであり、ある架空の交通事故についての250字程度の記述文（Isozaki(1984)を参考に作成；付録参照）を各自で読んだ後、加害者の事故責任判断とその確信度を各1項目で評定させた。具体的には、「事故の責任についてあなたならA氏（加害者）にどのような判断を下しますか」という質問に対して「無罪」（1点）から「無期懲役」（8点）までの8件法で測定した。さらに、「責任判断に自信がありますか」という質問に対して「全くそう思わない」（1点）から「非常にそう思う」（7点）までの7件法で測定し、これを自分の意見に対する確信度の指標とした。

次に集団討議をおこなわせるため、実験参加者に対して、グループ全員の意見が一致するまで話し合っグループとしての意見をまとめるよう要請した。各グループには、事故についての記述文が記載されていてグループの責任判断とその根拠について記述できる用紙を1枚ずつ配布した。自分の判断に固執することを防ぐために各自の冊子は伏せたまま見ないように教示した。

グループ全員の意見が一致するまで話し合うことを前提としたため、討議時間に制限を設けず、全てのグループで議論が終了し決定がなされたとき実験者が判断した時点で集団討議を終了させた。同じ人数の集団でもグループによって集団討議に要する時間は異なっており、3人集団で8～12分、5人集団で14～16分、10人集団で15分程度を討議に費やした。

討議終了後、実験参加者が個別で質問項目（飛田(1993)、吉原・飛田(1995)を参考に作成）に回答することを求めた。集団討議に対する満足の程度を「私のグループでは活発な意見交換ができた」「私はグループの判断に満足している」などの5項目、グループの成員に対する魅力の程度を「このグループのメンバーは魅力的である」「私はこのグループのメンバーともっと親しくなりたい」などの3項目、集団討議に対する自己の貢献度

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

を「私の意見はグループの話し合いに役立っていた」「私は、自分の意見をメンバーみんなに知ってもらおうとした」の2項目、集団討議に対する他成員の貢献度を「他のメンバーの意見はグループの話し合いに役立っていた」「他のメンバーはみんな、自分の意見を他の人に知ってもらおうとした」の2項目でそれぞれ測定した。この他に、グループや討議過程に関する評価として「意見の多様さ」「小グループの出現」「まとめ役が存在」「影響者の存在」「不参加者の存在」についてそれぞれ1項目で測定した。これらの項目には、「全くそう思わない」（1点）から「非常にそう思う」（7点）までの7件法で回答を求めた。

これらの質問に回答後、再度、「事故責任についての判断」および「確信度」についての測定を個別でおこなった。そして最後に「判断の際の他者からの影響の程度」について、影響の程度が強いと認知されるほど高得点になるようにして7件法で回答を求めた。

実験開始から終了までに要した時間は、20～27分程であった。

### 【実験計画】

独立変数は、集団のサイズ（3人・5人・10人）であり級間要因である。事故責任についての判断およびその確信度については集団討議の前後に質問していることから、これらの変数については独立変数として集団討議の要因（前・後）を設定した。また、事故責任についての判断に関しては、グループ決定を当該グループに所属する成員の個人的判断と同様のものとみなしたため、集団討議の要因は、討議前・討議中・討議後の3水準となった。なお、この要因は級内要因である。

主たる従属変数は、事故責任についての判断とその確信度である。また、集団活動性に関連した評価項目も設定された。その他に、集団討議に対する満足の程度を測る5項目、集団成員に対する魅力の程度を測る3項目、自己の貢献度を測る2項目、他成員の貢献度を測る2項目についてそれぞれ7件法で回答を求めたので、それぞれの項目に対する評定の単純加算点を各尺度得点とした。したがって、集団討議に対する満足度尺度は5－35

点の範囲を、集団成員に対する魅力度尺度は3-21点の範囲を、貢献度尺度はいずれも2-14点の範囲をとる。

## 結 果

### 【集団討議前後での責任判断および確信度の変化について】

集団討議の前後で責任判断を比較したところ、一貫した回答をしている実験参加者(29.2%)とより罪を重くした者(36.9%)、より罪を軽くした者(33.9%)がほぼ同数ずつ存在していた。この傾向と集団のサイズとの関連を検討したところ、有意な関連はみられなかった( $\chi^2(4)=1.83$ , n. s.)。つまり、いずれの群においても討議前後での責任判断が変化した者の比率に違いはみられなかったと言えよう。

表1に責任判断の集団討議前後での個人決定および集団決定の群別の平均値と標準偏差を示した。討議前の責任判断の群別平均値に有意な差はみられず( $F=0.125$ , n. s.)、分散も群間で異なるということにはなかったこと( $\chi^2(2)=0.26$ , n. s.)から各群の責任判断のベースラインは一定であるといえよう。集団のサイズと集団討議を独立変数とした分散分析の結果、集団討議の主効果が有意となり( $F_{(2,30)}=3.481$ ,  $p<.05$ )、Ryan法による多重比較では、討議前の個人決定と集団決定のあいだに有意差がみられた( $t_{(30)}=2.632$ ,  $p<.01$ )。すなわち、討議前の個人決定よりも集団決定の方がより責任を重く判断していた。この結果は、集団極化が集団サイズの違いに関連なく生じたことを示している。

集団討議の前後で確信度を比較したところ、確信度を強めている実験参加者が半数以上を占め(54.8%)、一貫した回答をしている者が3割程度おり(35.7%)、少数の者が確信度を弱めていた(9.5%)。この傾向とグループサイズとの関連を検討したところ、有意な関連はみられなかった( $\chi^2(4)=4.15$ , n. s.)。つまり、いずれの群においても集団討議前後での確信度の変化した者の比率に違いはみられなかったと言えよう。

表1に確信度の集団討議前後での群別の平均値と標準偏差を示した。集



表 1 各群における責任判断および確信度の平均と S D

集団のサイズ		3人集団 (N=54)			5人集団 (N=57)			10人集団 (N=57)		
集団討議		前	中	後	前	中	後	前	中	後
責任判断	平均	4.22	4.39	4.32	4.32	4.40	4.28	4.39	4.95	4.68
	S D	1.57	1.11	1.18	1.76	0.65	1.00	1.78	1.00	1.13
確信度	平均	4.39	-	5.09	4.47	-	5.09	4.47	-	5.33
	S D	1.39	-	1.14	1.45	-	1.22	1.27	-	0.98

各得点の最高点は7点であり、高得点ほど責任が重く判断され、確信度が強いことを示している。

団のサイズと集団討議を独立変数とした分散分析の結果、集団討議の主効果が有意であった ( $F_{(1,115)}=64.67, p<.01$ )。すなわち、集団討議を介して実験参加者は、自らの責任判断への確信度をより強めており、その傾向に集団サイズは影響を及ぼさなかったと言える。

### 【集団討議に関する諸変数について】

図1に意見の多様さ、小グループの出現、不参加者の程度、リーダーの

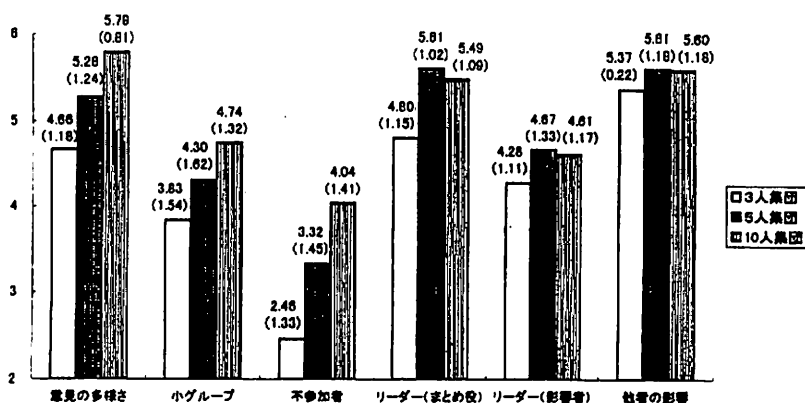


図1. 集団活動性に関連した変数の群別平均値(SD)

存在、他者からの影響の程度の群別の平均値と標準偏差を示した。

意見の多様さを従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、主効果が有意であり ( $F_{(2,114)}=14.456, p<.01$ )、Bonferroni法による多重比較では、全ての組み合わせにおいて有意な差がみられた (3人 vs 5人  $t_{(114)}=2.952, p<.01$ ; 3人 vs 10人  $t_{(114)}=5.373, p<.01$ ; 5人 vs 10人  $t_{(114)}=2.467, p<.05$ )。この結果は、集団のサイズが大きいほど、グループ内に多様な意見が存在したと実験参加者が認知していたことを示している。

小グループの出現を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、主効果が有意であり ( $F_{(2,115)}=4.960, p<.01$ )、Bonferroni法による多重比較では、3人集団と10人集団との間に有意な差がみられた ( $t_{(115)}$

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

=3.150,  $p < .01$ )。この結果は、集団が一定以上のサイズになると小グループが自然派生してくることを示している。

不参加者の程度を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、主効果が有意であり ( $F_{(2,165)}=17.171$ ,  $p < .01$ )、Bonferroni法による多重比較では、全ての組み合わせにおいて有意な差がみられた (3人 vs 5人  $t_{(165)}=3.177$ ,  $p < .01$ ; 3人 vs 10人  $t_{(165)}=5.857$ ,  $p < .01$ ; 5人 vs 10人  $t_{(165)}=2.717$ ,  $p < .01$ )。この結果は、集団のサイズが大きいかほど、集団討議に参加することができない、あるいは、やらない者が出てくることを示している。

リーダーについては、議論のまとめ役としての役割を果たす者とグループ決定に強い影響力をもつ者とを分けて考えた。

議論のまとめ役が存在を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、主効果が有意であり ( $F_{(2,165)}=8.890$ ,  $p < .01$ )、Bonferroni法による多重比較では、3人集団と5人集団、3人集団と10人集団の間で有意な差がみられた (3人 vs 5人  $t_{(165)}=3.926$ ,  $p < .01$ ; 3人 vs 10人  $t_{(165)}=3.336$ ,  $p < .01$ )。この結果は、集団のサイズが5人以上になった場合に議論のまとめ役が存在していたと実験参加者が認知していたことを示している。

強力な影響者の存在を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、有意な結果は得られなかった ( $F_{(2,165)}=1.649$ , n. s.)。

他成員からの影響の程度を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、有意な結果は得られなかった ( $F_{(2,165)}=0.699$ , n. s.)。

強力な影響者の存在、他成員からの影響の程度に関しては、分散分析で有意な結果が得られなかったが、いずれの群においても前者の平均値が4点以上、後者の平均値が5点以上であることを考えると、各群ともに集団討議を介して他成員の影響を被ったと実験参加者が認知していたと言える。

【集団討議に対する満足感、集団成員に対する魅力度、自他の貢献度について】

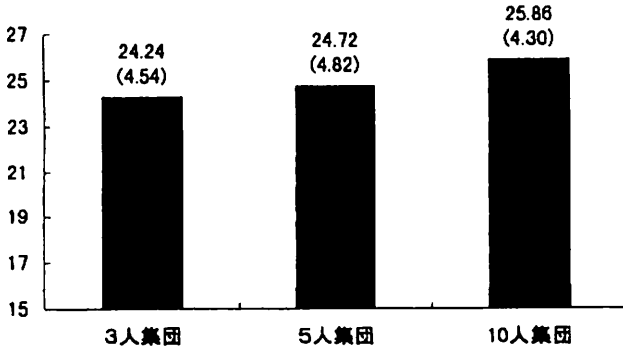


図2. 集団討議に対する満足感の群別平均値(SD)

図2に集団討議に対する満足感(範囲; 5-35)についての群別の平均値と標準偏差を示した。集団討議に対する満足感を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、有意な結果は得られなかった( $F_{(2,166)}=1.829$ , n. s.)。

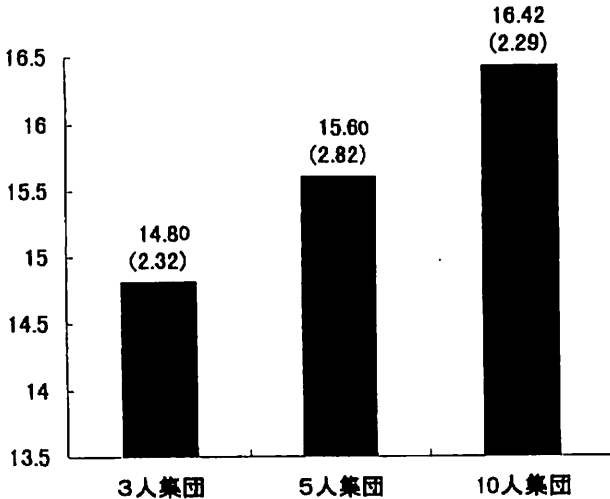


図3. 集団成員に対する魅力度の群別平均値(SD)

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

図3に集団成員に対する魅力度（範囲；3-21）についての群別の平均値と標準偏差を示した。集団成員に対する魅力度を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、主効果が有意であり（ $F_{(2,165)}=5.797$ ,  $p<.01$ ）、Bonferroni法による多重比較では、3人集団と10人集団との間に有意な差がみられ（ $t_{(165)}=3.404$ ,  $p<.01$ ）、他の組み合わせに関しても有意な傾向があった（3人 vs 5人  $t_{(165)}=1.676$ ,  $p<.10$ ；5人 vs 10人  $t_{(165)}=1.751$ ,  $p<.10$ ）。この結果は、大きな集団ほど実験参加者が集団内の他成員に対してより魅力を感じていたことを示している。

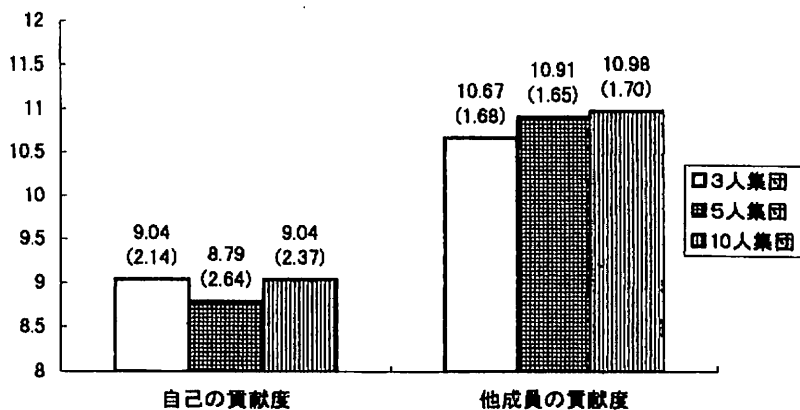


図4. 自他の貢献度の群別平均値(SD)

図4に自己および他成員の貢献度（範囲；2-14）についての群別の平均値と標準偏差を示した。自己の貢献度を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、有意な結果は得られなかった（ $F_{(2,165)}=0.196$ , n. s.）。同様に、他成員の貢献度を従属変数、集団のサイズを独立変数とした分散分析の結果、有意な結果は得られなかった（ $F_{(2,165)}=0.530$ , n. s.）。自他の貢献度に関しては、集団のサイズによる影響がみられず、また、実験参加者は、どの群においても一貫して自己の貢献度よりも他成員の貢献度の方をより高めに見積もっていた。他成員の数は、集団のサイズが大きくなるにつれて増加するわけだが、それにとまって特に他成員の貢献度がより高めに見積もられるということとはなかった。

【個人決定と集団決定との関連について】

表2 集団決定と討議前後での個人決定との相関係数

集団のサイズ	3人集団 (N=54)	5人集団 (N=57)	10人集団 (N=57)
討議前の責任判断	.491**	.058	.307*
討議後の責任判断	.849**	.502**	.781**

\* $p < .05$ ; \*\* $p < .01$

表2に集団決定と集団討議前後での個人決定との間の相関係数を群別に求めたものを示した。

特徴的なことは、それぞれの群において討議前の個人決定よりも、討議後の個人決定と集団決定とのあいだの相関が高くなっていること、5人集団において討議前の個人決定と集団決定との間に関連がみられないことである。

【討議前後での確信度、および、その変化の程度と他成員からの影響の程度との関連について】

表3 他成員からの影響の程度と討議前の確信度、討議後の確信度、および、討議前後での確信度の変化とのあいだの相関係数

集団のサイズ	3人集団 (N=54)	5人集団 (N=57)	10人集団 (N=57)
討議前の確信度	-.085	.199	.022
討議後の確信度	.254*	.524**	.146
討議前後での 確信度の変化	.337*	.303*	.103

+ $p < .10$ ; \* $p < .05$ ; \*\* $p < .01$

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

表3に集団討議前後での確信度と他成員からの影響の程度とのあいだの相関係数、集団討議前後での確信度の変化の程度と他成員からの影響の程度とのあいだの相関係数をそれぞれ群別に求めたものを示した。

討議前の確信度と他成員からの影響の程度とのあいだにはいずれの群においても関連がみられないが、討議後の確信度と他成員からの影響の程度とのあいだには5人集団で有意な関連、3人集団で有意に近い関連がみられた。また、3人集団および5人集団において討議前後での確信度の変化の程度と他成員からの影響の程度とのあいだに有意な関連がみられた。

これらの結果は、ある程度限られた人数（本実験では5人）で討議することが他成員の影響を被りながら実験参加者自身の意見への確信度を強めることにつながることを示していると考えられよう。

## 考 察

本研究の第1の目的は、集団討議の参加者の人数の違いが集団決定および個人決定に及ぼす影響について大学生を対象とした実験によって検討することであった。

集団極化現象の有力な説明理論である責任の拡散説と社会的比較説のいずれにおいても、集団討議の参加人数の増加は、集団決定をより極端なものにすると予測されたが、本研究の結果ではその予測は支持されなかった。集団決定は、討議前の個人決定よりも極端なものになっていたが、その傾向に集団サイズの違いによる影響はみられなかった（表1）。また、集団討議の参加者は討議の前後で決定内容を変化させることはなかった（表1）。ただし、集団決定と討議後の個人決定とのあいだの相関が、集団決定と討議前の個人決定とのあいだの相関よりも一貫して高くなっていることから（表2）、集団討議が討議後の個人決定に何らかの影響を及ぼしていたことが推測される。

上記推測に関する手がかりとして実験参加者の自らの意見に対する確信度が重要である。実験参加者は、集団討議を介して自らの意見に対しての

確信度を強めていることが示された(表1)。このことは、集団討議の中で他成員のさまざまな意見を聞き、自らも意見を述べ、討議し、考える過程を通して自己の意見についての確信を強めたのだと考えられる。本実験において課題として用いたのは、交通事故の加害者に対する責任判断であった。このようなトピックに関して判断することは実験参加者の日常生活の中で希であろうし、その判断内容が重大な結果をもたらすということもありえない。そのため、討議前の個人決定に関しては実験参加者の関与の程度が低く、確信をもつことも困難であったことが推察される。だが、集団討議の中で他成員との相互作用を通して当該のトピックに関して熟考することが、自らの決定に対する確信を強める結果になったのだと考えられる。このことは、ひとびとが日常的に考慮したり、接触したりする機会の少ないトピックに関しての個人的関与を高めるために集団討議を導入することが有効であることを示唆していると言えよう。

本研究の第2の目的は、集団サイズの違いが集団討議過程に及ぼす影響について検討することであった。集団サイズの増大は、集団内により多様な意見をもたらすといったポジティブな影響を及ぼす一方、小グループの出現や不参加者の程度を高めるなど集団活動の水準を低下させるような影響も及ぼしていた(図1)。また、相対的にサイズの大きな集団においては、議論のまとめ役としてのリーダーが存在していることが示された(図1)。つまり、集団サイズの増大は、集団活動を促進する効果と抑制する効果の両方をもたらしており、そのことが集団討議に対する満足感および自他の貢献度の評価に群間の違いがみられないという結果につながったのだと考えられる(図2、図4)。

3人集団および5人集団のみにおいて討議前後での確信度の変化の程度と他成員からの影響の程度とのあいだに有意な関連が見られたこと(表3)、集団サイズの増大が集団内の他成員に対する魅力の程度を高めたこと(図3)は、何を意味するのであろうか。相対的にサイズの小さな集団においては、比較的限定された意見に基づき、各成員が討議に積極的に関与したことが他成員の影響を被りながら自らの意見に対する確信度を強める結果



集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

につながったのだと考えられる。一方、相対的にサイズの大きな集団においては、集団内に多様な意見が存在するものの、集団討議への参加が困難であったことから成員個々人の討議への関与が低まり、むしろ、集団討議を通してより多くの人と知り合うことの方に実験参加者の関心が移行した可能性がある。このことは、本研究で用いた10人という集団サイズが課題に対して過度に大きな集団であったことを示唆しており、集団サイズには課題に応じた適正規模が存在するという考えを間接的に支持するものであろう。

ところで、本実験の課題として用いたトピックは、大学生の日常生活との関連が弱いものであった。新奇なトピックを実験課題として用いることは態度研究の常套手段ではあるが、ここで大学生にとってより身近で知識や経験を豊富にもつトピックを課題として用いた場合には、本研究とは異なる結果が得られていたのではないだろうか。ジグソー学習法によると成員間の知識が異質であることは、グループの活動性や学業成績を向上させ、成員間の人間関係をより友好的なものにすることが明らかである（Aronson, E. et al., 1975）。身近なトピックに関して討議する集団のサイズが増大することは、集団内の個々の成員のもつ知識や経験の範囲の拡大をもたらすことが期待されることから、集団決定および集団活動への集団サイズの効果がより直接的なものになると考えられる。本実験においては、討議前の個人決定の分散が群間で異なることはなかったが、実験参加者の認知においては、より大きな集団において意見が多様であったと評価されていた。これは、同じ決定でもその根拠が複数存在し、集団サイズの増加は、その根拠の多様さの幅の拡大をもたらしたことを示しているのだと言えよう。同様のことが実験参加者自らの経験や正確な知識に基づいてなされた場合、その情報はより説得力をもって他成員に受容されると考えられる。

また、本実験では集団成員全員の合意を成立させることで集団決定に至るという手続きを用いたが、実際の集団討議においてはむしろ多数決などの他の手続きを用いて集団決定を導き出すことがより一般的であろう。こ

のような集団決定に至る手続きの違いが集団討議過程や集団決定、および集団決定に対する成員の反応に対してどのような影響をもたらすのかについては、今後の検討課題とされる。

## 引用文献

- Aronson, E., Blaney, N. T., Sikes, J., Stephan, C., & Snapp, M. 1975 Busing and racial tension: The jigsaw route to learning and liking. *Psychological Today*, February, 43-59.
- 飛田操 1993 小集団問題解決場面における貢献度と満足度 福島大学教育実践紀要, 24, 145-151
- Isozaki, M. 1984 The effect of discussion on polarization of judgments, *Japanese Psychological Research*, 26, 187-193.
- 印南一路 1997 すぐれた意志決定 中央公論社
- Janis, I. L. 1982 *Groupthink: Psychological studies of policy decisions and fiascos* (2nd ed.). Houghton Mifflin.
- Lewin, K. 1953 *Studies in Group Decision*. In D. Cartwright & A. Zander (eds.) *Group Dynamics: Research and Theory*. Tavistock.
- McCauley C., Stitt, C. L., Woods, K., & Lipton, D. 1973 Group shift to caution at the race track. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 80-86.
- Myers, D. G. & Lamm, H. 1976 The group polarization phenomenon. *Psychological Bulletin*, 83, 602-627.
- Sanders, G. S. & Baron, R.S. 1977 Is social comparison irrelevant for producing choice shift? *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 303-314.
- 吉原智恵子・飛田操 1995 討議集団場面におけるマイノリティ、マジョリティの相互影響過程について 福島大学教育学部論集, 57, 55-65
- Wallach, M. A., N. Kogan, & D. J. Bem 1964 Diffusion of responsibility and level of risk taking in groups. *Journal of Abnormal &*

集団討議の参加者の人数が集団決定及び個人決定に及ぼす影響について（高良）

*Social Psychology*, 68, 263-274.

## 付 録

実験課題として用いた「酒酔い運転で死亡事故を起こした加害者」に関する記述および評定項目

A氏はいつもより仕事が長引き、疲れもあり、ビールを飲んで家へと車を走らせていた。自宅まで後わずか、信号も進行方向青を示していた。と突然、横断歩道を横切ろうとしていた老人の姿が目に入った。A氏は、とっさにハンドルを切ってブレーキをかけたが間に合わず、老人をはねてしまった。横断歩道の信号が赤にも関わらず横切ろうとした老人を責める気持ちと、信号がどうであれ飲酒と横断歩道付近で徐行を怠った気持ちとが重なって、A氏は混乱した状態になっていた。その後、老人は病院に運び込まれたが、間もなく息を引き取った。

「事故の責任についてあなたならA氏にどのような判断を下しますか。」

- 無罪（1点）－執行猶予（2点）－懲役六カ月（3点）－懲役一年（4点）
- －懲役三年（5点）－懲役五年（6点）－懲役十年（7点）
- －無期懲役（8点）

## 謝 辞

本研究のデータの収集については、琉球大学法文学部社会学科教育学・心理学専攻の中村尚子さん（平成9年3月卒業）の協力を得た。記して感謝の意を表します。